辺境の魔術師

春野隠者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
辺境の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ８８６５Ｊ

【作者名】
春野隠者

【あらすじ】
偉大なる女帝カーライル。彼女の築いた国は平和と繁栄のただ中にあった。魔法と呼ばれる太古の力は魔術と言い直され、広く繁栄の一助を担うことになる。
だが、良いことがあれば必ず悪いことがあるわけで――。

竜胆（前書き）

携帯からの投稿は初めてになります。何卒よろしく、お願いします。

竜胆

周囲を取り巻く炎の壁。肺を犯し、喉を焼く黒煙。涙と鼻水を垂れ流し咳こみながら、呆然と自分は死ぬのだと感じた。

間近に迫った圧倒的な死の気配は、酸素を燃やし尽くす炎の姿。貪欲に部屋の家具を飲み込み、天井にまで手を伸ばすその姿は自身の知りうるどんな生き物よりも、力強く獰猛だった。

あぁ、だと言うのになぜ……こんなにもその姿は美しいのだろう。身じろぎするたびに、鱗粉のように舞う火の粉。狂おしく酸素を貪り、私のお気に入りだったぬいぐるみも、不満だった服もその全てを舐め尽くし、深紅と紅蓮に染め上げる。天井に手を伸ばす姿さえ、愛するものに手を伸ばす哀切を感じさせた。

全てを飲み込む程に強く、だがそれゆえに他と共存できない存在。

あぁ、なんて悲しく強いのだろう。

炎の壁がじわりと包囲を狭める。もう肺が焼け付いてしまったのか、体の内も外も熱かった。

一瞬、美しかった炎が身をよじる。私は目を疑った。涙でかすれた瞳に映った炎が笑っていたのだ。孤独に、気高く、そして高らかに、笑っていたのだ。

それに、私は魅入られた。

魅入られてしまっていたのだ。

魔法が生活に深く根付いた大陸があった。その名をガーネリアという。その大陸に一つの国家が存在した。統一国家クレマチス、５００年の昔大陸全土を征服したクレマチスは統一後間もなく、『外敵が居ないので軍隊は不要である！』と言う恐ろしく単純明快な理由で軍隊を解散させた。

当時王政を執っていたクレマチスにおいて、王として君臨していたのは女帝カーライル・トリス・レ・アリシア。国民と軍部から、あるいは敵からでさえ絶対的な畏怖を受けていた青い髪を持つ美貌の女帝は“千年の眼を持つ”と呼ばれたほどの名君でもあった。

軍隊を解散させる代わりに、治安維持機関である竜胆を発足させる。当然のごとく予想された軍部からの反発と、各地の反乱を、彼女は発足したばかりの竜胆と彼女に従う少数の支持者を従えて全て平らげた。

龍さえ凌ぐと言われた魔法の才能。彼女の指導の元に力をつけた竜胆を擁して軍部解散の混乱をたったの3年で鎮めたのだ。そしてその後、国家の経営を元老院会議に任せると、数々の異名をほしいままにした女帝は忽然と姿を消した。

『反乱？　起こせるものなら起こして見せなさい。その時は時の彼方を飛び越えて討伐してあげてよ』と言う、不穏当極まりない言葉を残して、失踪した女帝の遺言が功をそうしたのか。

以来５００余年。大陸全土に覇を唱えたクレマチスは順調な発展と共に、空前の平和を享受していた。

炎術士

「やあやあ、ヒノコ・ブーゲンビリア君どうしたね？　常日頃変わらない仏頂面が常にも増して不機嫌そうではないかね。そんなことでは君の周りに集まる可憐な少女達が残念に思うよ？　こんな殺伐とした職場での唯一の楽しみ、あぁ目の保養！　言い換えれば性欲剤が集まらなくなってしまう――」

鉄拳一発、寝ぼけた狂った道化師（マッドピエロ）の口を封じる。朝から人格破綻者の最たる者に絡まれれば、誰でも機嫌は悪くなる。

私の周りにはどうしてまともな奴がいないのか。男と来れば人格的に壊れている。女の子と言えば、やたらと熱い視線を送ってくる。この年頃なら、普通に恋などして……。　一度事務の女の子達に相談したが、ヒノコ様はそのままで良いんです！　と力説された。説教じみたそれに、圧倒されてそれ以来まともな相談も出来はしない。

それに性欲剤ではなく、清涼剤だ。どこをどう間違えればそこまで言葉を履き違えるのか。

私よりも頭一つ高い同僚の顔に向かって、思い切り右のストレートを振り抜く。片目にサファイアを埋め込み、もう片方には髑髏の眼帯を付けているその面で、何が目の保養だ。文字通り、どの面下げて言うのか、お前は。

……いや、もしかしたら本気で性欲だの、なんのと言っていたのかもしれない。匂いとかで。

事務の仕事をしている普通の女の子達との会話は私にとっても、清涼剤だ。それがなんだか汚されたようで、背筋に悪寒が走り抜ける。

壁際まで吹き飛んだ同僚のプロテア・ガビリンス――道化師に止めを刺すべく蹴りを叩き込んでふと、気づく。

「……おはよう」

そう言えば朝の挨拶を忘れていた。

「ああ、おはよう。いつも思うが、その暴力的な所は何とかした方が良いんじゃないかね？　僕だから良いものの、一般的な人間相手なら間違いなく死んでしまうよ。繰り返していうが僕は平気だ！　否、むしろ良い！　君のそういう所が女の子達には人気の秘訣なのかね？　だったら僕もそれを取り入れて、君のいない間に――」

私の居ない間に何だというのか、不穏な言葉を言い終わる前に、もう一発入れて黙らせよう。真鍮入りのブーツが鳩尾に食い込む会心の手応えに満足し、私は自分の机に向かった。経験から言えば2、3分は立ち直れないだろう。

途中他何人かの同僚と挨拶を交わし、机に着くと雑然とした机の上に、一枚の封筒があった。朱印と共に封がされたその封筒を手に取った時、背後から声が掛かる。

「そう言えば君に辞令が来ていたよ。なんでも、地方都市ブローネまでの出張命令だとか。いやぁ、羨ましい！　向こうは今頃秋かな？　名物はなんだったか！　確かアップルパイだったな！　ふんわりと焼けたパイに――」

振り向きざまに、しなりを効かせたせた裏拳を叩き込み、話を終わらせる。立ち直りが早いな。

延々と怒濤のごとくしゃべり続けるプロテアの話を終わらせるには、肉体的なダメージをたたき込むしかない。

以前どこまで喋り続けるか試してみた強者がいたが、三日目に差し掛かった時点で耐えきれなくなったらしい。

「見たのか？」

機密文章の閲覧は、法律で禁止されている。減俸が怖くないらしい。私には理解できない神経をしている。したくもないが。

「まさか、そんな！　僕も減俸は怖いよ。書類を持ってきたのが、ムベ・ガルーラ君だったから――」

壊れたラジオか、何かのように喋るプロテアを実力行使で黙らせ、ムベを告発することを誓いながら封筒を開ける。いくら無意識の透視だと言っても、一度しっかりと懲らしめなければ。

中には予想通り、地方都市ブローネへの出張命令と、部長室へ出て来なさい！　との落書きに似た部長の便箋が入っていた。
その瞬間、思わず拳を握りしめる。
あぁ！　守護神へファイトス様、ありがとうございます！　この地獄のような環境から救い出してくださって！　ついでにカッコイイ彼氏とか、普通の会話ができる友達とか、贅沢は言いませんのでそのあたりもお願いします！
一通り胸の中で私の守護神に祈ってから、積み上げられた書類に向かった。
仕事に向かう私を確認したのか、プロテアはそれ以降話しかけてこなかった。変な所で、空気を読む奴だ。

「よっし！」
午前中に事務の仕事を始末すると、一度実家に戻る。風の魔術式で動くエアバギーでもあれば楽なのに……まぁ無い物ねだりしても仕方ない。
健康と美容のためにも歩くとしよう。実家に着いたら、着替えを旅行鞄に詰め込み、再び家をでる。空を見上げれば、青い空に竜車が雲を引いていた。

旅行鞄を自分の机の脇に置くと、私は部長室へ向かった。木目の鮮やかな扉を叩けば、それに応じて中から聞こえるのは、少女の声。
「ヒノコ・ブーゲンビリア入ります！」
扉を開けた途端、青い髪の少女が飛びついてきた。くりっとした目元に、整った鼻筋はどこか気品を感じさせた。
「ヒノコ〜」

甘えた声に、つい上司だと言うのを忘れ、頭を撫でてしまう。
えへへ、と笑う部長の笑顔に魅了されそうになってハッと気付く。遊びに来たわけじゃないのだ。私の腰の辺りに抱き付く部長を引き離し、彼女の目の前に書類を提示する。
「カトレア部長、印もらえますか？」
彼女の目線まで屈んでお願いするが、当の本人は不満に頬を膨らませていた。
「やだ！」
ぷいっと横を向くカトレア部長の頭を撫でつつ、殺し文句を口にする。
「ブローネの名物はアップルパイだそうですよ？　食べたくありません？」
空想の世界では、既に彼女の口にはアップルパイが収まったのだろう。ほっぺたがこぼれ落ちそうです～、という分かり易い表情を作る部長に、ぐいっと書類を近付けた。
先程の拒否はなんだったのか、アップルパイに陥落した部長はニコニコと書類に印を描いていた。書いた個人を特定できる魔術式が織り込まれた羽ペンで、さらさらと名前を書き終え、私の方へ差しだそうとした瞬間。敵の奸計に落ちた将軍のような表情で、動きを止めた。
「カトレアは、アップルパイなんかで買収されたりしませんよ！」
若干涙ぐむその姿が、愛らしい。ずっと見ていたいと言う欲求を飲み下し、奸計に落ちた将軍に止めを刺すべく、更なる一言を付け加える。
「大丈夫です。部長の分は二つ買ってきますので」
勝利を確信した私の頬が、悪役よろしく、弛んだのは致し方ない。欲望に陥落するカトレア部長が、天啓を受けた賢者のように、固まっているその手から書類を抜き取ると。
「では、失礼しました」
サッと身を翻す。この人の扱いにも大分慣れたな。

「ヒノコ」
勝利の凱旋を果たそうとした私の背を打つ声は、妖艶さ漂う大人のもの。
「三課の人が一緒に行くから、費用はあっちもちでね」
振り返った私の視界に映るのは、妖艶な美女の姿をした部長だった。
「お土産もですか？」
私のその問いに。
「当然」
極上の笑みを浮かべて、彼女は微笑んだ。

部長の部屋を後にして、駅へ向かう。威勢の良い呼び込みの声と色とりどりの竜達が、並んでいた。
飛竜。
大きな翼、それ自体に飛行の魔術式が組み込まれている。飛ぶために細身となった体。鋭い鈎爪は飼育される過程でなりを潜め、いたって愛らしい。風を切り空を走るその姿は、空の支配者の観がある。
古には、多種族を圧倒した龍達。だが、大陸国家クレマチスが君臨して以降彼らとの間には平和協定が結ばれていた。平和の恩恵として、龍達が使役していた飛竜の使用方法が伝えられたそうだ。
今では野生の飛竜を侍獣として使役する一方、養殖にも成功している。まぁ、差し迫って私には値段の問題でしかないのだが。
「綺麗な姉さん、安くしとくよ」　呼び子の声を、軽く受け流し目的の車両に向かう。
「あった」
飛竜が引く車両が少なく快適なのが、竜車と呼ばれている。もち

ろん移動速度は比べるまでもない。その分当然ながらお金はかかる。
一方、竜の引く車両が多く価格とサービスが一段階落ちるのが、揺り駕籠と呼ばれるものだ。そしてこれが、私の目指していた車両。揺り駕籠の名前の由来は、その形状からだった。赤ちゃんを乗せる揺り駕籠を巨大化させ、日差しと風を遮る天幕を張ったものだ。
近くにいた呼び子に、予約を取り、個室を用意してもらう。
最高級の竜車ではないが、今の私には充分贅沢と言えよう。なにせ自分の懐は痛まない。
灰色の飛竜が引く揺り駕籠に、軽食などを買い込み乗り込んだ。
ブローネまでは、順調に行けば八時間。睡眠を取るにも、景色を眺めるにしても充分に余裕があった。

噂喰い

朝のまどろみの中、心地良い朝日の温もりが閉じた瞼に降り注ぐ。
「起きて、パフィオ……遅刻しちゃうよ」
恋人のユーユが、俺っちの髭を舐める。くすぐったいその感覚に彼女を抱き締めて引き寄せる。
「もう、パフィオったら！」
爪を立てる彼女にキスの雨を降らせる。次第に抵抗が弱まる彼女の背を撫でれば、甘えた声で鳴く。
その時窓際に、連絡用の鳩が来なければユーユと二人愉しい時間を過ごしていたはずだ。それが、“竜胆”からの物でなければ、鳩なんか丸焼きにして食べてしまうのに！
純白の毛並み、ピンと立った気品漂う尻尾。色香と気の強さが同居する瞳、しなやかな体つきは野性的で、それでいて抱き締めれば壊れてしまいそうな儚さも合わせ持つ。
そんな恋人と僅かでも離れなければならないのは、何にも勝る悲しみだった。だが、仕事をしなければ彼女を養えない。
なんたる人生の矛盾！　愛する者と離れなければ、彼女と暮らせないとは！
一通り人生についての哲学的な悩みに煩悶したあと、彼女の白く美しい毛並みから手を離し、衣服を着る。対魔術繊維を織り込んだ黒いＹシャツの上から、白のスーツを身にまとい、最後にシルクハットを被って準備が整う。
「似合ってるかな？」
ベットの上で、俺っちの着替えを見守っていたユーユに問い掛ける。
「完璧！」
満面の笑みに送られて、俺っちは仕事にでかけた。

俺っちの勤め先は、この国唯一の治安維持機関“竜胆”だ。
クレマチスと言うこの国は概ね、四つの区画と中央に分けられる。北都ガーネット、東都セイラン、西都ヨーツェンハイム、南都モルモル。そして中央に首都クレマチア。“竜胆”はこれら全てを管轄する。
故に、治安を維持するための情報取得、武力行使、そして統括の全てを内包する。それぞれ、三課は情報を、二課は武力行使を、一課は統括をそれぞれ司る。
当然、三課から一課に進につれてその構成員は少なくなる。
「それで、その情報は確かなんだな？」
北都ガーネットの支部で、その話を聞いた。
「北都一の占い師の言葉だよ？　信じなさいな」
目深に被ったフードから、口元だけが見える。ニヤリと笑うその口の端に漂うのは、絶対の自信。
その様子に俺っちは眉をひそめた。シルクハットをかぶり直し、口元を引き結ぶ。挑戦的な、占い師の言葉。的中率９０パーセントを誇る占い師の言葉はやはり重い。
「噂喰いの紳士さん、二課から応援呼ばなきゃね？」
楽しげなその声に、暗澹たる思いがした。
「狂った道化師？　破壊屋？　それとも宵闇の主？」　次々と挙がる名前に、脳裡から湧き出す悪夢の記憶。
「ヒノコを要請してくれ」
「炎術士？」
ふふん、と笑う占い師の口元が挑戦的に歪む。
「冒険的な選択ね、あなたとの相性も悪くはないけど……他の人に比べればあまり成功率は高くないわ」

「俺っちの身の安全を考えない相性だろう？」
笑う占い師に背を向け、俺っちはブローネに向かうべく部屋を出た。

寒風吹き荒ぶブローネの駅。北都ガーネットの東、秋から冬に移り変わる季節は、既に極寒と言っていい。そんな中既に、二時間は立ちっぱなしの俺っちは横目でカフェを眺めた。別に不満はない。そろそろ髭が凍りそうだとか、肉球がかじかむとか、そんなことはない。
自らの信念に殉じているのだから、むしろ本望！　女性を待たせるなど紳士の信念に反する。
高い鳴き声と共に、飛竜の到着を知らせる笛の音が聞こえた。バラバラと駅から吐き出される人混みに、目的の人物を探す。
「むっ」
いた。思わず唸る。この二時間の寒さを思えば致し方あるまい。
人間の雌にしては、平均を頭一つ上回る長身。鮮やかな赤い髪をポニーテールにまとめ、周囲を鋭い赤い視線で見回す。中性的な顔立ちに、切れ長の鋭い瞳。豊かな体躯を包むのは、竜胆支給の黒い長外套。ブーツは実用一点張りの武骨なもの。
思わず振り返ってしまうような美人だろう……性格さえ良ければ。
周囲からの視線が煩わしいのか、眉間には深い皺が刻まれていた。爆発する前に、早く行かねば！
「ヒノコ！」
呼びかける声に、ヒノコが左右を睨む。
「下だ下！」
「ん？」
「久しぶりだな」

「……白いスーツを着た二足歩行の猫？」
シルクハットを忘れている！　いや、そうではない！
「パフィオだ！　竜胆三課所属、猫科ヒト目獣人類パフィオ・ペディラムだ！」
「冗談だ、久しぶり、パフィオ」
今のがウィットを利かせたジョークのつもりなのか。猫族の尊厳をあらかた奪い去る暴挙としか思えない。
だが、この程度はまだ許容範囲だ。人格破綻者の巣窟、竜胆二課の変人どもと付き合うなら、この程度で落ち込んでいては始まらない。
永遠に喋り続ける狂った道化師や、目を見開いた途端全ての物を破壊する破壊屋。奴らに比べればヒノコの精神攻撃など、まだ優しいものだ。
「遅かったな」
「揺り駕籠で来たから」　なぜだ。竜車の方が早いだろうに。
「これ」
疑念の眼差しを向ける俺っちに、一枚の紙を突き付けるヒノコ。受け取り、目を通せば領収書だった。
「部長が、経費は三課で持ってもらえってさ」
東都の魔女カトレアめ！　北都に戻るか、東都に立ち寄ったなら必ず悪い噂をばらまいてやる。
「パフィオ」　呼び掛ける声に、ヒノコを見上げれば表情の乏しい顔が僅かにしかめられていた。
「寒い」
「おお、すまない。カフェにするか？」
カフェを見て、俺っちを見たヒノコは即座に首を振る。
「宿でいい」
なぜか平坦なはずのその口調に、とてつもなく失礼なものを感じたのは俺っちの被害妄想ではあるまい。
だが、そんなものに挫けていては彼らとは付き合えない。

「分かった」
返事を返すと、俺っちとヒノコは宿に向かった。

一通り、今回の件を彼女に説明する。今回の任務は、この町で起こるであろう。禁忌魔術の阻止、もしくは被害の広がる前の速やかな制圧。
「具体性がないんだな」　ヒノコの皮肉に、俺っちも苦笑するしかない。北の占い師が告げたのは禁忌魔術がこの町で行われるということだけ。
月の魔力が強くなるこの1ヶ月が危険らしい。大ざっぱな予言にも似たその言葉の内容を確認し、殲滅するのが今回の任務だ。
「分かっているだろうが禁忌の魔術は、三つに分けられる。魔物の召還、キメラの生成、そして」
「死者の蘇生」
俺っちの言葉を次いだヒノコに頷く。禁忌の魔術はその危険度と倫理観故に、一般的には違法とされる。
「どれかは、わからないのか」
「それを調べるのも、今回の任務だ」
眉根を顰めるヒノコを励ますように、言葉を返す。どれかさえわかれば、対処に万全を期せる。実働部隊のヒノコが心配するのも最もだが、そのための俺っちの能力でもある。
「そこで、だ。明日からしばらくこの町で聞き込みをしたい。ヒノコには俺っちの護衛を頼みたいんだが」
「構わない」
短い返事に満足して、話を終える。部屋を出て行くヒノコを見送って、早々にベットに潜り込む。

「おやすみ、ユーユ」
遠くの彼女にせめて夢で会えるように祈りつつ眠りについた。

出逢い

ああ、どうしてこんなことになってしまったのだろう。
「おい、どうしてくれるんだ！？」
降りかかる罵声に、視線を上げる。これ見よがしに、右腕を抱え欲情に歪んだ笑みを貼り付けた顔を近付ける男の人達。
御主人様のお薬を買いに行った帰り、秋の紅葉に見とれ少し遅れてしまったのを取り戻そうと、いつもは通らない裏道を通ったのが間違いだった。
薄暗いその通りに、気持ちが急いていたのだろう。その気持ちを抱えて小走りに走っていた時、少し肩がぶつかってしまったのだ。今、私を取り囲む不良の人達に。
「聞いてんのか！」
背中に当たる壁が、殴りつけられる。思わず、首を竦めてしまう私に、男の人達の笑みに残酷なものがよぎる。漏れそうになる悲鳴をかみ殺す。
「だんまりかぁ？」
正面の男の人が唇をめくれあげるように笑うと、ヤニに黄ばんだ歯が見えてしまい嫌悪感が背中を走る。
思わず顔を背けて、視線をそらす。それをどう思ったのか、私に手を伸ばすと、力に任せて無理矢理彼らの方を向かせられる。
「可愛い顔してんじゃねえか」
「いや！」
口から溢れた私の悲鳴に男達が下卑た笑みを浮かべる。その笑みに、嫌悪感は悪寒にまでなっていた。
「抑えつけろ」　鋭く命じる声に、囲んでいた何人もの手が伸びてくる。手首を、首を押さえつけられる恐怖に体が竦んでしまう。
「や、め……」
喉を塞がれてうまく声が出せない。

「それじゃゆっくり看病してもらおうか。なぁに疲れたら俺達が、手厚く看病してやるから心配すんな」
下品な嘲笑が私を包む。抵抗できない悔しさに、涙が一筋、頬を流れた。
「お困りかね、お嬢さん」
聞こえた声は驚くほど近く、そして下から聞こえた。
「え？」
間の抜けた声が思わずでてしまう。それは私を取り押さえていた男達も同じらしかった。
その場の全員の視線の先には、シルクハットを被って白いスーツを着こなした猫が立っていた。虎猫模様に、愛らしい大きな瞳。ピンと張った髭が、口を開く度僅かに揺れる。私の腰まで辺りしかないその身長。
「ふむ」
気障っぽく腕を組み、目を細めて私と男達を見上げる。
「誘拐は犯罪だが、理解しているかね？」
シルクハットを人差し指だけで持ち上げ、私を庇うように立つ。
「な、なんだ、てめえは！」
ようやく、自分の立場を思い出した男達が猫さんに詰め寄る。
「ケッホ！」
開放された喉に一気に空気が入り込みむせてしまう。
「俺っちは、パフィオ・ペディラム。竜胆三課所属の魔術師だ」
“竜胆”の名前に私と男達に形に見えるほどの動揺が走る。圧倒的な数に囲まれて、だが堂々と胸を張る猫のパフィオさん。
「り、竜胆だと？」
男達の中から震えた声が聞こえた。恐れるのも当然だった。この国唯一の治安維持機関“竜胆”治安の維持を目的とした彼らの裁量権は大きく、その場で全員逮捕と言われれば、即座にその権限が発動されてしまうのだ。
私を取り押さえていた男達が焦るのも無理はない。

「いや、そんなはずはねえ！　こんな獣人の猫が竜胆みたいなエリートになんて――」
「そうだ！　はったりに決まってる！」
男達の話がまとまるのを待たず、猫のパフィオさんが目で合図した。
「事実なのだがね」
泰然自若とした態度は、男達に動揺と怒りに火を注ぐ結果をもたらした。
「うるせえ！」
男達の一人が懐から刃物を取り出し、強化（エンチャント）を施す。あらが目立つやり方だったが、当たれば相当深い傷になりそうだった。鈍色に輝く刃に、萎縮する私と、尚も泰然と構えるパフィオさん。
「ふむ、ならば俺っちも」
白いスーツの懐に手を伸ばすパフィオさんに、男達は目に見えて動揺した。
「卑怯だぞ！」
男達の悲鳴を無視して、一気に引き抜かれた。
「ぐわっ！」
「なんだ！？」
瞬間、白い閃光が周辺を照らす。目を潰す閃光の中。
「へ？」
私はパフィオさんに抱えられて、男達の包囲をすり抜けていた。
後ろから怒声が聞こえる。
「あっちだ！」
「追え！」
その小柄な体格の、どこから沸いてくるのかと言う程、私を支える力は強い。
だが、やはり私を抱えていては速度は出ないようで、徐々に距離が狭まる。
「あの、私降りますから！」

いわゆるお姫様抱っこという格好だが、後ろから迫る怒声に、そんなことを気にする余裕はない。
「問題ない！」
前を見れば、裏道の終わり。大通りへと差し掛かる交差点まで走っていた。流石に、あの人たちも人目がある場所では無茶なことはしないだろうか。
一瞬の安堵に、体の力が抜ける。
「待ちやがれ！」
だが、私の楽観的な予想はあっけなく裏切られる。後ろの男の人たちは一向に追う速度を緩める気配はなく、それどころか追ってくる人数が増しているような気さえする。
「むっ！」
「あの、やっぱり！」
後ろを確認したパフィオさんに、声をかけるが彼は無言で前を向き直る。
「心配ないと言ったろう！」
猛然と駆け去る前方に背の高い赤い髪の男の人が見えた。
「ヒノコ！」
パフィオさんの声に、切れ長の瞳は朱宝玉（ルビー）の輝きを持って私を捉えた。
パフィオさんが私を抱えて彼の後ろに回りこむのと、追ってきた男の人たちが、私達を取り囲むのは同時だった。

喧嘩

パフィオ（ペット）が突然居なくなったと思ったら、男をたくさん連れて戻ってきた。

これがもっと身なりと顔が良ければ嬉しい所だが、生憎と私の要求する基準は満たせていない。

ああ、守護神へファイトス様！　猫に、私に対する恩返しをさせるのは構わないのですが、もっとまともな男を見繕ってくる頭脳を与えてやってください。

「やっと追いついたぜ」

そうか、そんなに必死になってまで私に会いたかったのか。

だが失格なものは失格だ。

「手間をかけさせやがって」

そうか、そんなに手間をかけて私に会いたかったのか。

だがそれにしてはみすぼらし過ぎないか？

「さあ、大人しくついてきてもらおうか！」

強引なのは嬉しかったりもするが、人数が合わないだろう。私と後ろの女の子。こちらは3人……しかも一匹は猫で、しかも男だ。それに比べて向こうは6人はいる。

2対1は私でもちょっと……私もあしらいに慣れているわけじゃないのだ。

もしかして飢えているのだろうか。猫でも襲ってしまうぐらいに。

だとしたら恐ろしい街だ。

だが、君達が女の子に縁がないのは、服装にも問題があるのではないだろうか？　女性をデートに誘うのならば、せめてそれなり……紳士服を纏えとは言わないが、身奇麗にするだけの礼儀を示すべきではないだろうか。

無精ひげは伸びっぱなし、下品に笑う口元からは脂に汚れた黄色

い歯が覗く。ぼろぼろの服に、手には凶器……なってない。いや、むしろ最低だな！　だが、私のためにわざわざナンパしてくれた者を無碍にするわけにもいかない。
さて、なんと言って傷つけずに断ろうか。
「おい、赤毛の野郎邪魔すんのか！」
野郎？
つい、いつものプロテアに対する反応で手が出てしまう。空中で三度回って、そいつは地面に落下した。
……やってしまった。条件反射とはいえ、思わず天を仰ぐ。
色めきたつ男達に、なんと言い訳したものか。
いや、誤解なんだ。
「てめえ、いい度胸じゃねえか！」
凶器をちらつかせ、私に迫る男。
「きゃっ！」
後ろの悲鳴に、咄嗟に振り向く。と、パフィオに抱えられてきた女の子に、強引に迫る男が居た。
「――おい」
強引過ぎるだろう。思わず低い声が出る。
咄嗟のことに私はつい、女の子に迫る男の手首を握っていた。悲鳴を上げてのけぞる男に、笑みがもれる。演技がうまいな、役者志望だろうか。
「どこ見てんだこの野郎！」
野郎？　後ろで怒鳴ったソイツは、地面に頭からめり込んだ。
「あの、ありがとうございます」
助けた女の子の視線が、やたらと熱い。
やめてくれ！　そんな目で私を見るな！　それは経験の少ない私でもわかる、恋する乙女の視線じゃないかっ！！
脳裏で鳴り響く警鐘の音。
「いや――」
まずい！　このままでは職場と同じ現状になってしまう！　なん

とかこの子に冷たい言葉を浴びせて、距離を置かねば。
「てめえ！」
立ち上がらない二人に、残る４人は手に手に魔術式を展開させる。
「っち……どいてろ！」
間が悪い男達だ、私は今誤解を解かねばいけないというのに！
最低限、冷たい言葉を彼女にかけて、男達に向き直る。
あせる男はもてないと、誰かに教わらなかったのだろうか。
だから失敗するんだよ、ナンパ男君達！
しかし、魔術式はいただけない。それもこんな人通りの多い場所で。
「……はい」
……おかしい。
“邪魔だからどいていろ”そう告げたはずだ。至極冷たいはずの扱いにも、後ろから聞こえる声は甘かった。
ああ、もうめんどくさいっ！！
「天を貫く、雷の御霊」
男達がかざした右手。その前、空中に薄っすらと発光する魔術式が浮かび上がる。大外に太古の言葉を刻んだ円、その円の内側に浮かび上がる幾何学模様を幾度も練り合わせた複雑な、魔術式――。
――雷の鞭。
護身用に使われる魔術だった。それが２つ。もう二人はパフィオに向かって走っていた。
前唱（ぜんしょう）から始めるから、どんな大技かと思ったが……。
眼鏡をポケットから取り出して、私も右手をかざす。
『炎よ――』
既に勝ちを確信したかのような自信に満ちた男達に向けて。
『――踊れ！』
指先に瞬時に展開される五つの魔術式――五指に灯る炎の塊が、疾駆する。
「奔れ雷！」

詠唱の声はわずかに私のほうが早かった。
発現する雷を炎が飲み干して術者に向かう。
驚愕に引きつる男たちの足元に、炎をぶつけた。ぼろぼろの衣服に燃え移る炎。
それを見ながら、ああ――ナンテキレイなんだろうと。燃え上がる炎を調整しなくて――このまま肉の塊を燃やしたらドンナニカコウバシイ匂いがカゲル――くそっ！
調子が悪い。
指先に灯る炎を消し去り――炎をまとわせて転げまわるごみムシどもを。
“もう一人め！”
パフィオに向かった――私のペットに――二人の男を――消しズミニ――とめなくては。
動かそうとする足が、――転げまわるゴミをツブソウ――動かない。
ああっ、モヤシタイ。
くそっ！！
思い切り右手で頬を殴りつける。
鋭い舌打ちとともに、心の平静を必死に保つ。
落ち着け落ち着け落ち着け！
薄く切れた口の端の血を舐めとって、“もう一人”に向かって呟いた。
「邪魔すると切っちゃうよ」
戒めのように宣言すると、パフィオに向かって声をかける。
「パフィオ！」
その声にすかさず、逃げ回っていたはずの猫は方向を変える。
私が目に入らないかのようにパフィオを追いかける男を二人。間合いに飛び込んできたところをカウンター気味に迎え撃った。
「疾っ！」
短い気合と共に、肝臓を抉る角度で拳が入り込む。悶絶する男を

蹴り飛ばし、最後の一人に向き直る。
「う、うわあ！」
がむしゃらに振られる腕をすり抜け。
「うっざい！」
がら空きの顎に向かってひねりを加えたこぶしを突き入れた。
「ああ、もう――」
やってしまった……。
座り込みたい脱力感を押さえ、仰いだ天は、私の考えなど考慮にないと言ったように澄み渡る青だった。

喧嘩（後書き）

一話ごとに一人称が変わります。誤字脱字、感想などもらえたら嬉しいです。

冥府の女神

「にゃー」

いつもながら、ヒノコの格闘術は容赦がなかった。一人は完全に病院へ直行だっただろう。見ているだけで肝臓の辺りが痛い。

だがしかし、世に蔓延る悪にはそれ相応の裁きが必要なのも事実。これを教訓として、世の中には触れてはならぬものがあることを彼らには学習してほしいものだ。

「にゃー」

担架で運ばれていく彼らを見送って、ヒノコと先ほど助けた少女を見る。なにやら困惑している様子のヒノコ。そして一目見てわかるほどに、瞳を輝かす少女。

黒曜石のような黒い瞳、長い髪は艶やかな黒をしている。ほんわかとした笑顔に、若干頬を染めていた。背の高いヒノコを見つめる様子は、まるで憧れの先輩を慕う後輩。

もしくは恋する乙女……。

いや、それはないか。人族の雌同士だしな。

「にゃー」

しかし、問題はヒノコだ。

なにやら炎を扱うときに問題を抱えている様子。いつもなら、難なく扱っているはずの炎を操れないとすれば、それは憂慮すべき事態だ。ただでさえ、普遍魔術（ノーマル）が扱えないのだ。特殊魔術（ユニーク）が扱えないとなれば、ただ格闘ができる人族の雌でしかない。

いかにその技術が群を抜いていようとも、魔術なしで魔術には対抗できない。

応援を呼んだ方が安全だろうか？　だが今回は俺っちが無理を言ってヒノコを指名したのだ。応援を勝手に呼んでしまっては、俺っちはともかくとして、ヒノコ自身の今後のキャリアに影響する。

本人がいくら気にしない性格だろうと、やはり俺っちは困る。

ヒノコには、どうあっても頑張って貰うしかない。
「にゃー」
さて、彼らの逮捕の罪状を適当に見繕って、その後は聞き込みをせねばな。
「あの、パフィオ捜査官」
戸惑いがちにかけられた言葉に、思わず視線を向ける。
視線の先には困惑しっきったかのような竜胆支部の職員たちの顔。
む、なんだ？
「あの、先ほどから何を仰っていたのでしょう？　生憎我々は猫族の言葉はわからないもので……」
申し訳なさそうなその職員の言葉に、首をかしげる。俺っち何か言ってただろうか？
「えっと、先ほどから……にゃーにゃーと」
む、またやってしまったか。
「なに、気にしないでくれたまえ。考え事をするときの癖みたいなものだ」
紳士の嗜みとして、独り言は止めようと思っているのだが、癖はなかなか抜けないものだ。
「はっ、では我々はこれで」
律儀に敬礼する職員を見送ると、シルクハットを被り直し、ヒノコと少女の方に向かう。
「やっぱり女の子は笑っていた方が似合うな」
口に出した言葉に、少女がハッと俺っちを振り返る。
「あ、パフィオさん……ですよね？　先ほどはありがとうございました」
丁寧なお辞儀と共に、長く艶やかな黒髪が揺れる。
使っている香水は、冥府の女神（アルティシア）だろうか。ほのかに漂うその香りは、死者を導く女神の慈悲だそうだ。ユーユに教えられた香水の知識が頭を掠める。
「カレン・ジュラと申します。ホルディウム様のお屋敷に奉公させ

ていただいています」
スカートの端を持ち上げての丁寧な礼に、思わずヒノコと視線を合わせる。
「ホルディウム？　冒険者、ラディード・ホルディウムか……そういえば彼の生家はこの辺りだったような」
「知り合いか？」
ムスッとしたまま問いかけるヒノコの頭を疑う。
「知らないのか？　有名な冒険家だぞ？　ついでに中央では名士だ」
眉を潜めるだけの、ヒノコ。本当に知らないのだろう。
戦い以外では全くと言っていい程、頼りにならない。二課は、もう少し戦い以外にも頭の使い方があるということを教育すべきだ。
「はい！」
自身のことを褒められたかのように、はにかむカレン。その彼女が、恐る恐るといった風に、ヒノコに視線を向ける。どこか期待と好奇に満ちた視線に、居心地が悪いのか、ヒノコはむすっとしたままだ。
「改めて、パフィオ・ペディラムだ。竜胆の捜査官をしている。そして――」
「ヒノコ・ブーゲンビリアだ。一応、捜査官」
何も睨み付ける必要はあるまい……。
「あの、失礼かもしれませんけど……ヒノコ様って女性の方ですか？」
なぜに、様付け？　俺っちはさん、でヒノコがさま……この扱いの差は何が原因なのだ。人族特有の仲間意識のなせる業なのか！？
「ああ、見えないか？」
「……いえ、そのとても……カッコいいな、と」
見るからに落胆するカレンに、ヒノコはどう思ったのか。
「屋敷まで送ろう」
意外な申し出だ。てっきり彼女のことを嫌っていると思ったのだが。

「パフィオ」
「わかっている。仕事は明日からにしよう」
仕事に関する資料もまとめねばならない。余計な手間を取ってしまったが、一人のレディを救ったと思えば安いものだ。
ヒノコに付き添われて家に向かうカレンを見送り、俺っちはねぐらにしている宿へ向かった。

恋慕

「ああ、見えないか？」
がっくりとひざを突いて泣き崩れてしまいたい。ヒノコさまの言葉に、私の恋は破れたのだと知った。
短い恋だったと、自身に納得させるように帰ろうとしたとき。
「送ろう」
私の思惑とは裏腹に、ヒノコ様は私に優しく付き添ってくれる。
パフィオさんと別れて、二人で家路を辿る。
うぅ、冷たそうな印象とは裏腹に優しいなぁ。
隣に並ぶヒノコ様の顔を仰ぎ見る。ポニーテールにまとめた緋色の髪、切れ長の瞳に整った鼻筋、りりしく引き結ばれた口元は、白いマフラーで今は隠されていた。何より印象的なのは、赤い宝玉（ルビー）色の瞳。こういう人を男装の麗人というのだろう。中性的な顔立ちと高い身長、まさに私の理想だった。
「どうかした？」
前を見据える凛々しい顔立ちがふと、緩む。
向けられた笑顔は、私の悩みなんて吹き飛ばしてまうように優しくて……頬が熱い。
だめだ。
心臓がバクバクしちゃう。隣に並ぶヒノコ様に聞こえてしまわないかと、不安になるほどに私には大きく聞こえた。
「いえ……」
口から出た言葉が尻すぼみに小さくなる。
何でこんなに恥ずかしいんだろう。相手は同じ女の人なのに。
うぅ、走ってしまいたい！　逃げ出してしまいたいけど、でももうちょっと二人で歩いていたい。
矛盾してる。矛盾してるのはわかっているけど、どうしようもな

い。
「こっちは、寒いね」
「え、はい！」
思わず出てしまった大きな声に、ヒノコ様が目を丸くする。まじまじと見詰め合って、ヒノコ様の目元が笑みに緩む。
ああ！　私の馬鹿あぁぁ！
心の中で絶叫し、うつむく。俯くしかできなかった。
「面白ね、カレンは」
「ぁ、はい……」
恥ずかしいのに、ちょっと嬉しい。
そんな自分の馬鹿っぷりが恨めしかった。
大通りを突き当りまで行って、左手に曲がる。高級住宅街の一番奥。丘の上にあるお屋敷までは、後もう少しといったところ。
残る時間の短さを思って私はあせる。何か話さなくっちゃ、でも何を？
握った手は汗ばみ、緊張に喉がカラカラに渇く。唇を舐めて気持ちを落ち着かせる。
「あ、あの！」
精一杯緊張を押し殺して出した声は震えていた。だがいまさら後戻りはできそうにない。
「ん？」
やわらかいその笑みに、引き込まれそうになる。
「ひ、ヒノコ様は……どんな食べ物が好きですか？」
って、何を聞いてるんだ私はっ！
これじゃまるで私が食べ物大好きみたいじゃない！
食べもの、ヒノコ様に食べられ……うわあぁぁぁ！
「ん、そうだね……甘いものは結構好きかな」
ぅぅ、ごめんなさいヒノコ様。私は悪い子です。ヒノコ様を想像の中だけとはいえ、穢してしまったような気がします。
「わ、私も好きです」

す、好き……あぁぁ！
ヒノコ様の言葉に、自分の言葉を重ねて興奮してる。私のバカバカッバカッ！
ぁ、お屋敷が見えてきた。終わってしまう。
でも、何を言おう。
丘の上の屋敷の全容が次第に大きくなり、私の焦りを加速させる。何かを言わなければいけない。でも言うべき言葉は、渇いた喉に絡まって口から出て行こうとはしなかった。
ついに玄関の前まで来てしまう。
「ここ、かな？」
見上げるヒノコ様に。
「はい、ありがとうございます」
泣こう。結局何も話せなかった。部屋にこもって一晩中泣き明かそう。
「それじゃ……」
「あ、カレン」
え？　何だろうもう用事はないはずだけど。
「いや、あのさ」
ヒノコ様がすごい言いづらそうにしているように見える。
きょろきょりと落ち着かない目線、ほんのり頬も赤いような？
「今度さ、美味しいお菓子のお店とか紹介してくれないかな？」
え？　ええ？
で、ででデートですか！？
「だめかな？」
「いえ、是非！　こらこそ！」
「うん、じゃまたね！」
またね、またね……じーんと胸に染み渡るこの感動。この言葉がこんなにも嬉しかったのはいつ以来だろうか。
うぅ、やったーー！

恋慕（後書き）

感想、誤字脱字の指摘などあればお願いします。

善意

宿の自室に戻り扉を閉める。
「ふふ……ふふふ」
思わず笑いがこみ上げる。
手に入れた。
普通の女の子の友達！
ああ、守護神へファイトス様！　今日ほど貴方に感謝した日はありません！　最初に私にむられた熱い視線にこの子もだめかと思いましたが、私が女だと宣言した途端のあの落ち込みよう。
カレンは普通の女の子でしたっ！
自分で自分を紐で縛り付け、私の全部をもらってくださいとか言う友達は要りません。ヒノコそっちの方はだめなの～？　とか失望交じりに言うような友達も要りません。
遊びに行こうと言ったらホテルに行こうとする友達も、もちろん要りません。
普通に遊んで服とか選んだりとか、パフェとか食べたりする友達がほしかったのです！
ヘファイトス様、感謝します！
「後は……」
後はカッコいい彼氏で、私の願いは全部かなうが、いきなり高望みはいけないだろう。
まず友達は手に入れた。これで良しとしようじゃないか。
旅行鞄から服を選び出し、ベットの上に並べてみる。どれを着て行こうか。思わずにやける自分が気持ち悪い。
「ヒノコ、戻っているか？」
扉を叩く音と共に聞こえた猫の声が、私を現実へと引き戻した。

「ああ、戻った」
急激に醒めていく自分の心が、この時は酷く恨めしかった。

「まず、ヒノコ」
猫が指し示す先には、紙に書かれた色々なこの町の噂が書かれていた。
「今日は街の南側を聞き込んだ」
「護衛は良かったのか？」
「取り合えず支部の人手を借りたからな」
明日からは手伝わないといけないな。頭の隅に留め置いて、紙に書かれた噂に目を落とす。
――夜になると、野良犬が喋りだす。
――学校には幽霊がでる。
――赤い髪の竜胆の捜査官は片手で、２０人のチンピラを難なく締め上げた。
「……何だ、これは？」
特に最後のは、私のことだろうか。
「何だと言われても、資料だが」
ただの噂話の類だろう？　さり気なく最後のは嫌がらせだろうか。
朕がなっていないペットは、獣と変わらない。一度私がしっかりと朕と言うものを――。
「待てヒノコ！」
「む？」
「何を考えているか知らないが、違うからな！」
心を読む猫？　パフィオにそんな器用なユニークが使えたとは。
だとしたら、今まで私の心を読んで居たことにならないか？　何と

いうプライバシーの侵害だ！
やっぱり、私が人間社会の常識を肉体的指導でもって――。
「おまえには話したことが無かったが、俺っちのユニークは『噂喰い』と言う！」
私の手が動く前に、聞きたいことに答えるパフィオ。本当に心が読めないのだろうか？
もし仮に、肉体の危機にパフィオの関知しないユニークが目覚めていたのなら、猫族の未来は明るい。この程度で目覚めるなら、もっと強力なのを喰らわせたらどうなるのか。実に楽しみだ。
「パフィオ」
「なんだ？」
「一度、殴らせろ」
「何故だ！？」
ピンと張った髭がピクピクと動く。引きつった顔がなんとも、そそる。
「お前の、ひいては猫族の未来のためだ」
背の低いパフィオに上段からの一撃を加えようと、拳を振り上げる。
「……逃げるなよ」
背筋から肩に伝わる力。腰を入れた一撃を、空気を切り裂く雷のような勢いをもって繰り出す。
「――っ、ヒノコ本気じゃないか！」
ちっ、外した。
とっさにしゃがんだ猫のシルクハットが、音を立てて壁まで吹き飛ぶ。
「止めろ、話せば分かる！」
「私の理由は話した。大人しく殴らせろ！」
「全くわからん！」
がなる猫に下段蹴りを仕掛ける。踏み込みの気配すら見せず、最短の距離を走る私の右足が猫を襲う。

「くぅ！」
ちっ、また逃げた。頭をねらった下段蹴り。そのさらに下、床にへばりつくようにして猫が転がっていた。
だがしかし……ふふ、追い詰めたぞ。
じりじりと距離を詰める。もう逃げられない。弛む口元に弦月の笑みが浮かぶ。
「ふふふ……」
「ヒノコ、落ち着け！？」
「死ねぇ！」
真鍮入りのブーツが、頭上まで振り上げられる。過去に男の両腕の骨を粉砕した一撃が、床に張り付いた哀れな獲物に向かって死神の鎌よろしく振り下ろされた。
「束縛する鉄鎖！」
瞬間、パフィオのスーツから蛇のように伸びた鉄鎖が私を絡め取る。
「ちっ」
振り下ろした右足も、絡め取られてしまった。
「死ぬ所だったじゃないか！」
ノーマルか。私が使えないことを良いことに、好き勝手してくれる。
「惜しかったな」
「なにを考えていたか知らないが、俺っちは痛みに喜び震える趣味はない！」
無いのか。まぁいいが。
「私はお前の新たなユニークの開発をだな……」
「ヒノコ、ユニークは1人一種類しか使えない。中等部ので習うことだが、覚えているよな？」
そうだったか？　記憶を探る私に、パフィオがため息をつく。
「あぁ、俺っちのシルクハットが～」
悲しげな声に、なんだかやる気を殺がれた。それにしても、鎖が

体に食い込む。胸とか、太股とか、それと……。
「パフィオ、鎖解いて」
自力で抜けることも可能だが、今は出来るだけ炎を使いたくない。
「もう暴れたりしないか？」
そんなジト目で睨むな。
「多分」
「捜査にしっかり協力するか？」
無言で首を縦に振っておく。かなり素直な答えのはずだが、パフィオの視線は厳しいままだ。
「……解放せし鉄鎖！」
じゃらじゃらと音を立てて鎖が床に落ちる。やっと解放するつもりになったのか、まったく疑り深い奴だ。鎖は床に落ちると同時に透明になって消えた。
使い切り型の道具に一瞬視線を落としてから、手首をさする。
善意というものは、難しい。

噂喰い2

いきなり牙をむいたヒノコを何とか退け、椅子に座り直す。
「で、だ！」
ぐしゃぐしゃになったシルクハットをテーブルに置く。
「俺っちのユニークだが大分扱いにくいんだ」
身に降りかかる理不尽をぐっと我慢する。紳士たるもの、種族の違いはあれど女性に対して怒りをぶつけてはなるまい。
未だ座らないヒノコが鋭い視線を向けていた。
「俺っちのユニークは噂喰いと言うのは前に話したな？」
「うん」
なんだその恨みがましい目は！？　断じて俺っちは悪くないのに、俺っちが悪いみたいな気がしてくるじゃないか！
「具体的には、噂を分析する能力だと思ってくれていい……」
「噂、ね」
紙に書かれた噂に視線を落とすヒノコ。やっと話に乗ってきたか、全く。
それを横目で確認すると言葉を次いで行く。
「禁忌の魔術に必要なものは、潤沢な月の光。そして場の形成だ」
考え込むように腕を組むヒノコに、俺っちはトントンと机を叩いて注意を引く。
「魔術式はもちろんのこと、その周囲の環境をも整えなきゃいけない。元々廃墟なんかは条件が揃ってるが、今回はこの街中だ」
「条件って？」
「一言で現すなら、負の力場とでも言えば良いのかな？　死者蘇生、魔獣召還、キメラの生成……どれにも通じて言える事は、負の力場がなくちゃ成功しないということだ」
「仮に、それがないとどうなる？」

「待っているのは術者の死」
自分自身口に出して言うのが汚らわしく感じる。
「死者蘇生なら、怪異を。魔獣召還なら、誘惑を。キメラの生成なら、混沌を。それぞれの力場に振りまかなければならない」
「力には代償を――」
自分で言った言葉にヒノコの目が一瞬例えようもなく鋭くなる。
「今回、事件が起きると予言されたのは、街中。だが北の予言者の話では、大量殺戮やそういう類の力場の形成はないそうだ」
「どこまで信用できるんだか」
ヒノコの不満も最もだ。俺っちも半信半疑ではある。しかしデータは無情な事実を突きつけるのだ。
「最も穏便な力場の形成が、噂の操作だ」
「だからパフィオなのか」
「うむ」
付け加えるなら、大昔ならいざ知らず、治安の安定している昨今において一番使われる手法が噂の操作である。大っぴらに殺戮などしてしまえば、竜胆が戦力を惜しみなく送り込んでくるのが目に見えているからだ。
「ふぅん」
曖昧な頷きに、その事実を伝えるべきか迷う。
俺っちって時代に必要とされる男なんだぞ！　わかってるのかヒノコ！？
だからいきなり俺っちを殺そうとするのはやめてほしい。
社会的損失等諸々を含めて是非に。
「そこで俺っちのユニークの出番となる……まぁ、とりあえずその噂を読み上げてみてくれ」
渋々なのだろうヒノコの眉間による皺が深い。
「俺っちは術の発動後、五時間ほどは完全に動けなくなる……頼むぞヒノコ」
「わかった」

『喰い破れ、貪欲なる者』
言霊の詠唱と共に、俺っちの額に熱が奔る。魔術式が展開した証だ。
ヒノコが読み上げる噂が脳内で噛み砕かれ、形を留めぬまでに消化されていく。
次第に重くなるまぶたの中、南の噂は怪異を告げていた。

忍び寄る足音

屋敷の掃除を終え自分の部屋に戻った私の鼓膜をたたいたのは、こつこつと言う音。

「……便箋？」

見れば窓の外には、足に便箋を結わえた白い鳩が居た。便箋に相手の名前と住所を書けば、後は鳩が届けてくれると言う郵便制度が定着してはや１００年近くたつ。そんな歴史の知識を思い出しながら、観音開きの扉を開けた。

結び付けられた便箋をとけば、鳩は跡形もなく消えてしまった。

「誰からだろう……」

呟いて見たその差出人の名前に、私は心臓を鷲掴みされる思いだった。

「ヒノコ様！？」

時間が経てば経つほど、社交辞令だったのではないかと不安になっていた私に、ヒノコ様からの便箋は夢と現実をつなげる架け橋のように思えた。

震える指先で、便箋を開いて文字を追う。

「来週の日曜日……」

来週の日曜日、時間があるなら遊びに行こう。と言う簡単な文章。だけど、それを何度も何度も読み返す。

「恋文でも来たか？」

後ろから聞こえた声は、獰猛な息遣いと侮蔑に似た笑みが混じっていた。

「っ！」

反射的に便箋を抱きかかえると、背後のソレに向き直る。

「そう警戒するな、何もしたりはしない。何せお前は我が主の花嫁

だ」
唸り声を上げながら喋るソレの言葉に、背筋に冷たいものが走る。
「くくく……そう心配するな。それに俺は忠告に来たのだ」
「忠告？」
「うむ、テリトリーに侵入者があった。二匹いたが、一匹は中々によく遣う」
犬歯をむき出しにソレが愉しげに笑う。
「炎と鍛冶（ヘファイトス）の神の信者だな。歪ではあったが戦えば倒すのは難しかろう」
炎と鍛冶――ヒノコ様！？
「明日にでも目立たぬ方法で消そうと思うが」
「やめて！」
「……なに？」
思わず出た大きな声に、ソレが訝しげに私を見る。
「奇怪なことを言う。俺はお前の望みを叶える為の最良の意見を述べたつもりだがな？」
「あの人は、竜胆の捜査官よ！　もし下手に手を出せば、私たちでは手に負えない人達が来るかもしれない……だからしばらくは静観して！」
「ふむ、なるほど……俺も、この体ではな。しかし、もう敵と接触するとは運命（ナディア）の女神の加護までもらっておるのかのう？　くくく、まぁお前がそこまで言うなら俺は静観しよう」
その答えに、ほっと息をつく。ヒノコ様を傷つけるなんて、考えただけで息が止まりそうだった。
「月が満ちるまで、後１８日……もう後戻りはできないのだ。精々楽しんだらいい」
陰惨な笑みを刻むと、ソレは音もなく影に消えた。
「話せば、わかってくれる……よね？」
甘い希望だろうか。昨日少し話しただけの、赤の他人のはずのあの人にそんな幻想を抱いてしまうのは。

満月にはまだ遠い月が、窓から明かりの手を差し伸べていた。

接触

噂と言うのは中々、油断できないものだ。
昨日片手で２０人だったのが、今日には１００人に増えていた。
しかもなぜか、数字は誇張されるのに私の容姿に関しては、そのまま伝わるのだから始末に終えない。
「パフィオ」
「なんだ？」
私の前を歩くパフィオのシルクハットがゆらゆらゆれる。蹴り飛ばしたくなる衝動をこらえて冷静に息を吐いた。
「噂が変だ」
「尾ひれが付くのはむしろ当然の流れ。タイムリーな話題だからな」
ちぇ、すっかり答えを用意していた様子に苛めたいという気持ちがムクムクと沸いてくる。
「ひぃ」
目の前を通り過ぎる人が、悲鳴を上げて避けていく。あの噂のせいか？
私はこれでも健全な女なのだ。社会に出たのが早いとはいえ、年齢はいまだ１０台。ぎりぎりではあるがうそではない。
それが何の因果で、顔を見られるたび悲鳴を上げて道を譲られねばならないのだ！
まったく。
元はと言えば全てこの猫が悪いんじゃなかったか！？
だが、まぁ仕事は仕事だ。割り切らねば……。
気持ちを落ち着かせるため、大きく息を吸って吐く。人目に付かない程度の動作で、最小限心の入れ替えをする。
「……妙だな」

今日噂を探っているのは街の東側、駅を中心とした地域を回っていた。　人目に付かない裏路地。町の東側は海岸沿いの町との交易や、駅のある関係上比較的新しい家が多い。良くも悪くも煩雑なこのあたりは入り組んだ家並みが建ち並ぶ。
「何が？」
　別に怪しい奴がいるわけでもない。むしろ居なさ過ぎてがっかりだ。八つ当たりの相手すらいない。
「噂の様子が南側とでは一変しているように感じるのだ」
　うん？
「まぁ詳しいことは宿に戻ってから、調べて見ねばわからないが」
　そう前おきして手帳を開く。
　――夜になると開業する獣医がいる。
　――竜胆の捜査官は片手で１００人を軽く叩きのめした。
　――日によって月の大きさが変って見える。
　――冒険者が何人も行方不明になっている。　何が違うんだ？
私にはさっぱりわからない。
難しい顔をする猫を小突く。
「まぁ、早めに切り上げようか」
　先頭に立って歩き出すパフィオ。護衛としては全くつまらないが、平穏無事なのは良いことなのだろう。
　私も帰ろうと思い、パフィオの後に続こうとした瞬間。
　空気すら重くするような殺気に、思わず後ろを振り返った。
「っ！」
　誰もいない。路地の暗がりには、ただ一匹犬がいるだけだ。だがその景色は常夏の島からいきなり、氷の世界に飛ばされたような隔絶がある。
「パフィオ！」
　声を抑えることも忘れて叫ぶ。
「ん？　どうしたヒノコ」
　脳天気な返事、緊張感の欠片もない声に軽く殺意を覚える。パフ

ィオが気づいていないということは、私にだけ向けられたのか？
だが、悪寒を感じるほどの殺気を感じながら私にはその出所がわからない。
「いや、気のせいだ……」
違う、と感じながら口にでた言葉は真逆だった。パフィオに向けられていないのなら、いったんこの場所から離れるべきだ。
心の中から湧き上がる焦燥感に近い悪寒。それを振り払うように、パフィオを追い立てるように路地から抜け出した。

不具の魔術師

宿に戻った時には既に夕方になっていた。途中ヒノコの挙動がいつにもまして、おかしかったが何かあったのだろうか。
宿に戻れば早速ヒノコに噂を読んでもらう。

やはり、おかしい。五時間の束縛の後、目が覚めれば脳裏に浮かぶのは疑問だった。
俺っちのユニークである噂喰いで導き出された結論は誘惑。つまりは、魔獣召喚が行われようとしていることになる。
これでは一昨日の結果と食い違う。
俺っちのユニークである噂喰いは、占いなどとは違う。噂を分析し、事実を抜き出す代物だ。
「ヒノコはどう思う？」　あまり期待は出来ないが、念のために聞いてみよう。
「さぁ？」
期待はしていなかったが、あまりの気のない返事にがっくりと肩が落ちる。
「ニャー」
だとすると、思い付く可能性は2つ。
一つ目は魔術師が2人いる。二つ目は、魔術師が両方を行うほどの優れた人物か。
「ニャー」
だが、二つ目の可能性は限り無く低いだろう。禁忌の魔術は一つ使うだけでも相当に難しい。それを同時に使うなど、度をすぎている。

「ニャー」
となれば、最も可能性が高いのは――。
「うるさい！」
頭上から降ってくる拳を咄嗟に飛び退くことで避ける。
「何をするヒノコ！？」
いやな汗が背中を伝う。ヒノコはもっと自身の危険性を弁えるべきだ。
しかも、ヒノコの格好が何やら物々しい。赤い髪を一つにまとめ、背の高い彼女の体を覆うのは長外套。黒色の実用性一点張りのものだが、竜胆支給の対刃対魔術用の防護繊維を織り込んだ優れものだ。
前を開けた長外套の奥に見えるのは、こちらも防護繊維を織り込んだ服。
手には甲の部分に朱宝玉（ルビー）を嵌め込んだグローブ。魔術の威力を高めるための、支給品だ。普通は指ぬきのものだが、彼女の場合には敵を殴れるように、補強が為されている。
そして足元は、俺っちも昔話でしか聞いたことしかないが、昔の軍人が使うようなカーゴパンツに漆黒の武骨なブーツ。
「戦争にでも行くのか？」
かなりの重装備に、別に驚きはしないが、出来れば俺っちを巻き込まないでほしい。故郷には愛する恋人が……。
「さっき目当ての奴を見つけたかもしれない」
「なに！？　どこで？」
思わず聞き返す。
「昼に行った路地裏」
装備を確かめるヒノコに、俺っちは思わず窓の外を見る。俺っちがユニークを使ったのが、夕方だ。時刻はすでに深夜と言っていい。
「今からか？」
流石に危険過ぎだろう。
「行くのは私一人だ」
「何を言う！？　相手は複数かもしれないのだぞ」

噂喰いから導かれた結論で、最も可能性が高いものがそれだ。
「そうか、ならさっさと探し出して各個撃破だな」
深紅の瞳に一瞬だけ狂暴な色を浮かべ、腕を組む。
「せめて昼になるまで待ってはどうだ？　必要なら支部から人手も呼べる」
「そんなに確証があるわけじゃないんだ。それに――」
元々、整っている顔立ちが壮絶に歪む。戦いに狂うものたちが身にまとう愉悦の笑み。
「売られた喧嘩は買う主義だ」
だが、俺っちが知るヒノコはこんな笑い方をする奴だっただろうか。何か違和感がある。まるで別人のような。
「パフィオ」
ヒノコの声で我に返る。改めてみたヒノコは、いつものヒノコだ。
「私は、不具の魔術師だ」
向けられた視線と言葉は、真剣そのもの。女性にしては鋭すぎる深紅の瞳が、俺っちを見据える。
そして。――不具の魔術師。
ある魔術においてのみ特化した魔術師達に対する蔑称だった。著しくその分野には秀でることはできる。だが、その代償は日常生活すら覚束無い程に大きい。長年の平和により魔術の恩恵が隅々にまで行き渡るクレマチスでは、尚更だろう。
「うむ」
神の寵愛を受けたと言われる彼らに、ほとんどの人々が抱く感情は羨望か嫉妬。そして嫉妬は容易に差別に変わる。
慰めの言葉も見当たらない俺っちは、シルクハットを深く被り直した。
「私は、負けない」
言い切るヒノコに危うさを感じたのは、あまりにも余裕がないからか。
「ヒノコ」

冷静になれと言って聞くだろうか。何がヒノコをそこまで追い立てるのかわからないが、俺っちには伺いしれないものが、あるのだろう。
「分かった」
「ありがとう」
「だが、最低限の保険はかけさせてもらう。俺っち達は仕事で来ているんだ」
俺っちに譲歩出来るのはここまでだ。
「分かった。それでいい」
頷くヒノコに、俺っちは同行を申し出た。
「だめだとは言えないはず。俺っち自身が保険だ」
渋々頷いたヒノコと共に、宿をでる。
「どうなっても知らないからな」
そっぽを向くヒノコ。
「心配するな、紳士は勝てないと思ったら即座に逃げる。何の問題もない」
隣から聞こえた盛大な溜め息に、俺っちは髭を動かした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8865j/

辺境の魔術師

2010年10月10日18時47分発行